



# 幕末～昭和初期の 日露関係史の知られざるエピソード

日程

第1回  
4/4

第2回  
4/18

第3回  
5/16

第4回  
5/30

15:30～17:00

講師 ロシア・東欧学会会員  
上野 俊彦

[uenot\\_gosudarstvo@yahoo.co.jp](mailto:uenot_gosudarstvo@yahoo.co.jp)  
<http://uenot.g1.xrea.com/>

# 第2回 ニコライ皇太子の来日

- ①4/4 『ヘダ号の話』 2024年4月4日(木) 15:30~
- ②4/18 『ニコライ皇太子の来日』 2024年4月18日(木) 15:30~
- ③5/16 『神田ニコライ堂の話』 2024年5月16日(木) 15:30~
- ④5/30 『満鉄と哈爾濱 (ハルピン) 』 2024年5月30日(木) 15:30~



ニコライ皇太子  
ゲオルギオス王子 有栖川威仁親王

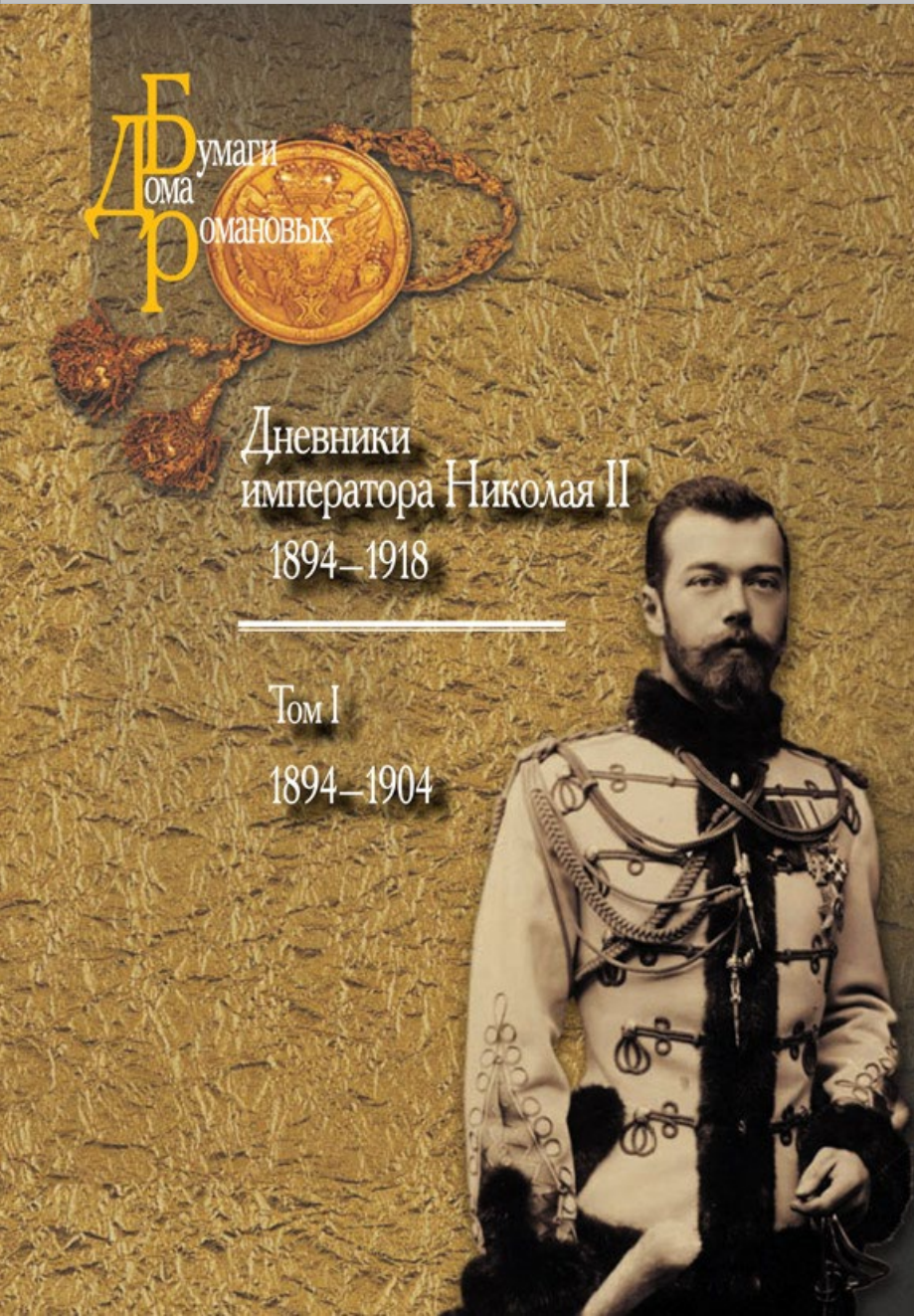
## 第2回講義 ニコライ皇太子 の来日 概要

- 1 ニコライ2世の日記
- 2 ニコライ皇太子の東方旅行
- 3 長崎とロシア
- 4 大津事件
- 5 ニコライ2世は日本嫌いは俗説

### この講義の目標

- ①ニコライ皇太子来日までの経緯について知る。
- ②ニコライ皇太子来日中の出来事について知る。
- ③大津事件後のニコライ皇太子の心情について知る。
- ④大津事件後の日本側の動きについて知る。
- ⑤大津事件の結果、ニコライ2世は日本嫌いになった、という俗説がなぜ生まれたのか考える。

# ニコライ2世の日記



ロシア帝国最後の皇帝ニコライ2世（1868/5/18～1918/7/17、在位1894/11/1～1917/3/15）の日記は、1882～85年と1887～1918年7月13日に書かれた50冊が残されており、ロシア連邦国立文書館に保存されているが、1886年分は残されていない\*1。それらのうち、皇帝就任後の1894年以降の部分は、活字化され、出版されている。しかし、ニコライの来日は1891年なので、来日時の日記の原文を活字で読むことはできない。

出版された日記の最新版は、2011年に第1巻、2013年に第2巻が出版されたものだが\*2、第2巻が2冊に分かれているので、全3冊である（写真は2011年出版第1巻表紙）。これらは、ロシア連邦文書館による電子版\*3が公開されているので、オンラインで誰でもアクセスできる。

\*1 ミロネンコ、S. V.責任編集『ニコライ2世の日記（1894～1918）：全2巻』、2011年（ロシア語）、第1巻、3頁（Дневники императора Николая II (1894-1918) : в 2 томах. / отв. ред. С. В. Мироненко. – М. : Российская политическая энциклопедия (РОССПЭН), 2011, т. 1, с. 3.)。

\*2 前注参照。

\*3 電子版のアドレスは、以下の通り。

第1巻（1894～1904）<https://statearchive.ru/1630> PDFファイルは

[http://opisi.garf.su/pdf/2023/BDR\\_Dnevnikimp-Nicolaia%202\\_tom-1.pdf](http://opisi.garf.su/pdf/2023/BDR_Dnevnikimp-Nicolaia%202_tom-1.pdf)

第2巻第1分冊（1905～1913）<https://statearchive.ru/1631> PDFファイル

[http://opisi.garf.su/pdf/2023/BDR\\_Dnevnikimp-Nicolaia%202\\_tom-2\\_ch-1.pdf](http://opisi.garf.su/pdf/2023/BDR_Dnevnikimp-Nicolaia%202_tom-2_ch-1.pdf)

第2巻第2分冊（1914～1918）<https://statearchive.ru/1632> PDFファイルは

[http://opisi.garf.su/pdf/2023/BDR\\_Dnevnikimp-Nicolaia-2\\_tom%202\\_ch-2.pdf](http://opisi.garf.su/pdf/2023/BDR_Dnevnikimp-Nicolaia-2_tom%202_ch-2.pdf)

# 抄訳日本語版ニコライ2世の日記

## ニコライ二世の日記

最後のロシア皇帝



保田孝一  
*Yasuda Koichi*

1983年9月、保田孝一岡山大学教授(当時)が、ソ連中央国立十月革命史料館(現、ロシア連邦国立文書館)に保存されている「ニコライ2世の日記」原文を閲覧し、その成果を出版した\*1。

保田のこの著書は、活字では読めない来日時の日記の内容を含めて、ニコライ2世の日記を紹介しており、ニコライ2世は、「大津で津田三蔵に斬りつけられたことを根にもち、日本人を『猿』と軽蔑し、日露戦争を仕掛け、日本を征服しようと望んだ」人物であったという俗説\*2を覆すニコライ2世像を描き出した。保田の紹介した日記の内容に基づけば、事件当時のニコライの言動や日記等には、ニコライがもともと日本嫌いであったとか、大津事件の結果、日本嫌いになったとか、ということを示すものはまったく見当たらず、むしろ「定説に反して意外に親日的」である\*3。

\*1 「ニコライ二世の日記」として1985年1~3月に12回にわたり『週刊朝日』に連載、1990年に朝日新聞社(朝日選書)から『最後のロシア皇帝 ニコライ二世の日記 増補』として出版。書籍版は雑誌連載記事に若干の加筆があるため「増補」となっている。なお、保田は、本書の7~8頁で、ニコライの日記は51冊が残されているとし、1886年分が欠けていることには言及していない。ちなみに、現在、この朝日選書版は入手困難であり、容易に入手可能なのは、朝日選書版の再版である講談社学術文庫版(保田孝一『最後のロシア皇帝 ニコライ二世の日記』講談社、2009年)である。ただし、本講義における同書からの引用は朝日選書版による。

\*2 同上、263頁。

\*3 同上、1頁。



# ニコライは日記で日本人を猿呼ばわりしているのか？



冒頭で紹介したロシア語版『ニコライ2世の日記（1894～1918）：全2巻』2011年版の編者は、その解説「ニコライ2世の日記：研究と出版の歴史」の中で、「皇帝はおよそデリカシーのある人だが、日記は率直でときに非外交的である。とくに日本に対して。彼はときどき日本人を『猿』と呼んでいる」（5頁）と書いている。やはりそうなのか、と思ってしまうが、幸い電子版があるので、「猿」に類する単語（猿のほか、ヒヒ、テナガザル、キツネザル等を含め、計7単語）を検索すると、以下の2箇所「猿」がヒットした。

1897/11/8 露歴10/27	朝食後、宮殿の馬場に行き、そこでレオンチェフがメネニクのところから連れてきた馬、牛、猿を見た* <sup>1</sup> 。
1900/5/29 露暦5/16	新公使、猿のコムラを引見した* <sup>2</sup> （コムラとは、駐露公使として1900年5月24日に着任した小村寿太郎のこと）。

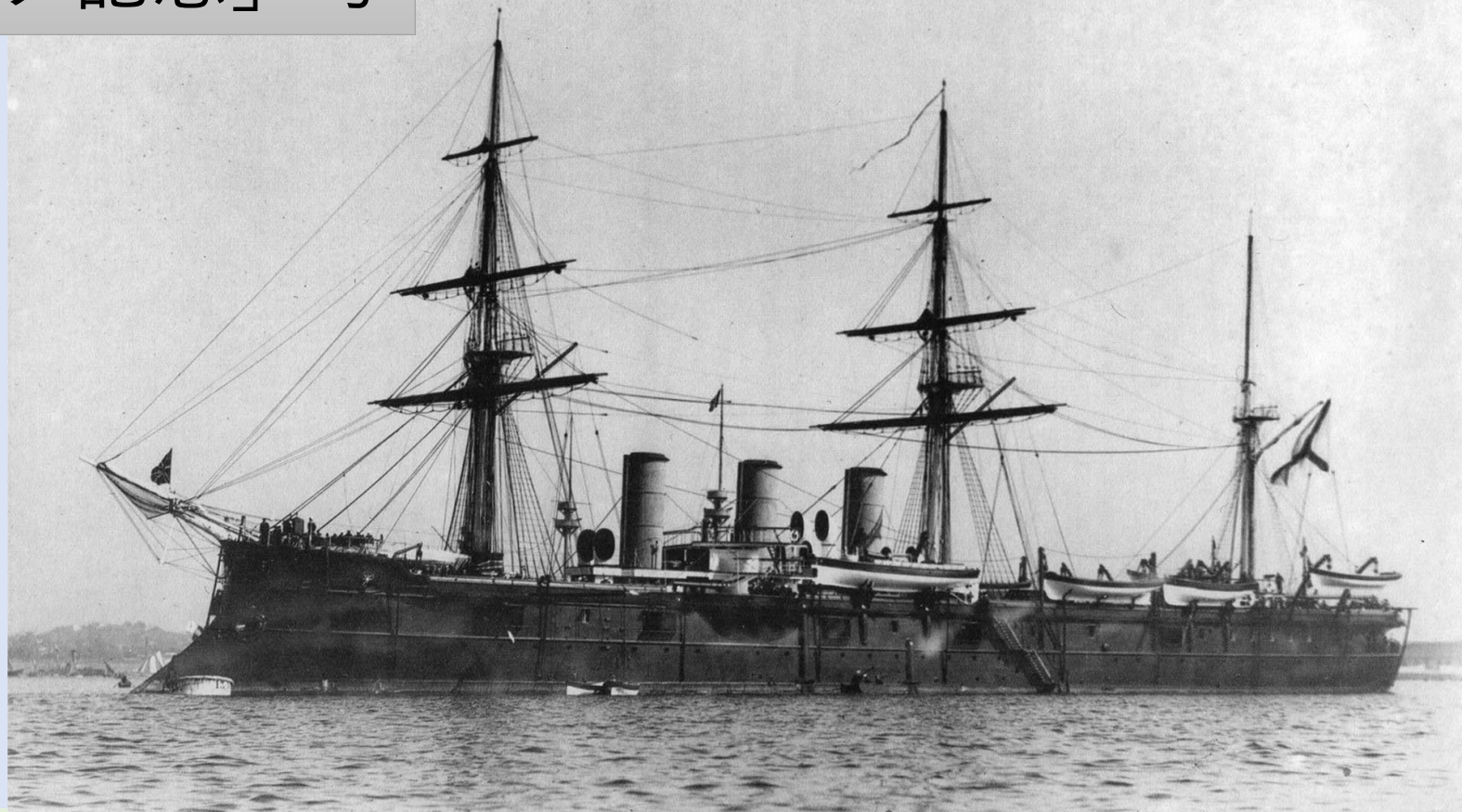
\*<sup>1</sup> 第1巻372頁。これは、明らかに、日本・日本人とは無関係。

\*<sup>2</sup> 第1巻535頁。小村寿太郎は、150cmに充たない身長、その容貌、活発な行動力から、欧米外交団のあいだで「ねずみ公使 rat minister」と呼ばれていたという逸話があるが、ニコライの目からは「猿」に見えたのであろうか。しかし、この記述が、一人歩きし、「ニコライ2世は日本人を猿呼ばわりした」という話がつくられた可能性はある。しかし、発見できたのは、この1箇所だけである。だとすれば、上記の解説の「ときどき」という記述に疑問が生ずる。

# ロシア海軍巡洋艦「アゾフ記念」号

ロシア海軍巡洋艦「アゾフ記念」号

ロシア帝国ニコライ皇太子（のちのニコライ2世、当時22歳）は、帝室外交の一翼を担い、諸国での見聞を広めつつ、ロシア極東のウラジヴォストークで行われるシベリア鉄道起工式に、父親のロシア皇帝アレクサンドル3世（1845/3/10～1894/11/1、在位1881/3/13～1894/11/1）の名代として出席するため、サンクト・ペテルブルクから、1890/11/4、9ヵ月にわたる東方旅行に出発した。最初は鉄道で東欧を縦断、ウィーンを經由してトリエステ（アドリア海に面するイタリアの港湾都市。当時はオーストリア領）に移動、そこからロシア海軍巡洋艦「アゾフ記念」号\*により出港した。

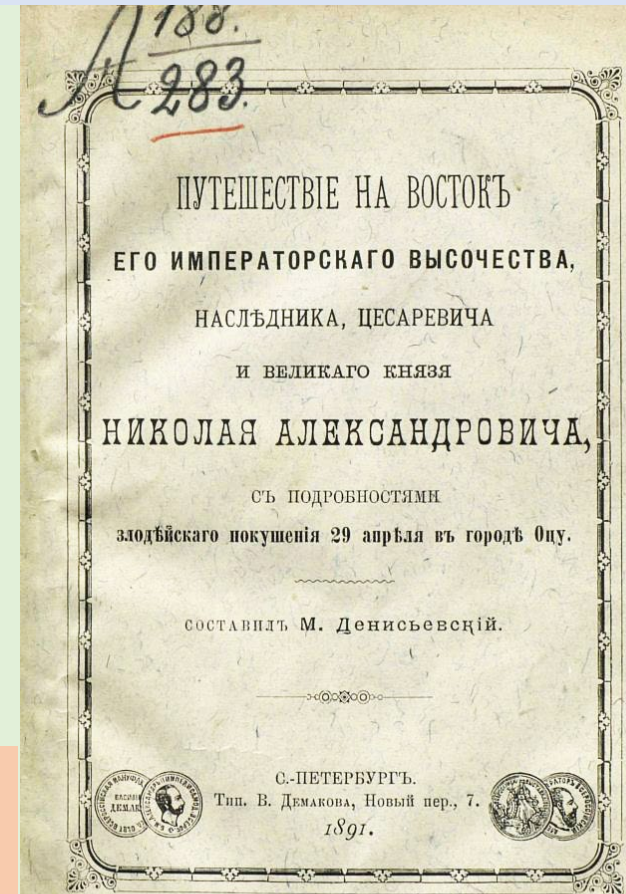


\* 排水量6734t、全長115.6m、幅15.6m、喫水6.9～7.2m (<https://navsource.narod.ru/photos/02/012/index.html>)、士官30名、水兵574名が乗艦（デニシエフスキー『ニコライ皇太子の東方旅行、大津市での4月29日の事件の詳細を含めて』Денисьевский М. М., Путешествие на Восток его императорского высочества, наследника, цесаревича и великого князя Николая Александровича, с подробностями злодейского покушения 29 апреля в городе Оцу. 1891, с. 8. [<https://www.prlib.ru/node/441233/source> または <https://archive.org/details/01003551771>])。なお、このとき少なくとも2隻の随行艦も出港している。ちなみに、「アゾフ記念（パーミヤチ・アゾーフ）」号という艦名は、ギリシャ独立戦争に際してギリシャのナヴァリノ湾で英仏露連合艦隊とオスマン帝国艦隊とのあいだで1827年に行われた「ナヴァリノの海戦」で活躍したロシア軍艦「アゾフ」号の栄誉を称え、それにあやかって名付けられたものである（『2巻本海事百科便覧 第2巻』Морской энциклопедический справочник в двух томах. Том 2. О - Я, 1986, с. 51. [<https://djvu.online/file/VapxWamzE7eQm>])。したがって、「アゾフ」号は別の軍艦の名称であるから、「アゾフ記念」号を、保田の著作を含め複数の文献が「アゾフ」号としばしば略記しているが、略記すべきではない。 7

# ニコライ皇太子とゲオルギオス王子



ニコライ皇太子（写真右）を乗せた「アゾフ記念」号は、最初にギリシャのアテネに寄港し、ここでウラジヴォストークまで同行するギリシャ王国ゲオルギオス王子（写真左）を乗船させている。



前頁で紹介したデニシエフスキー『東方旅行』表紙

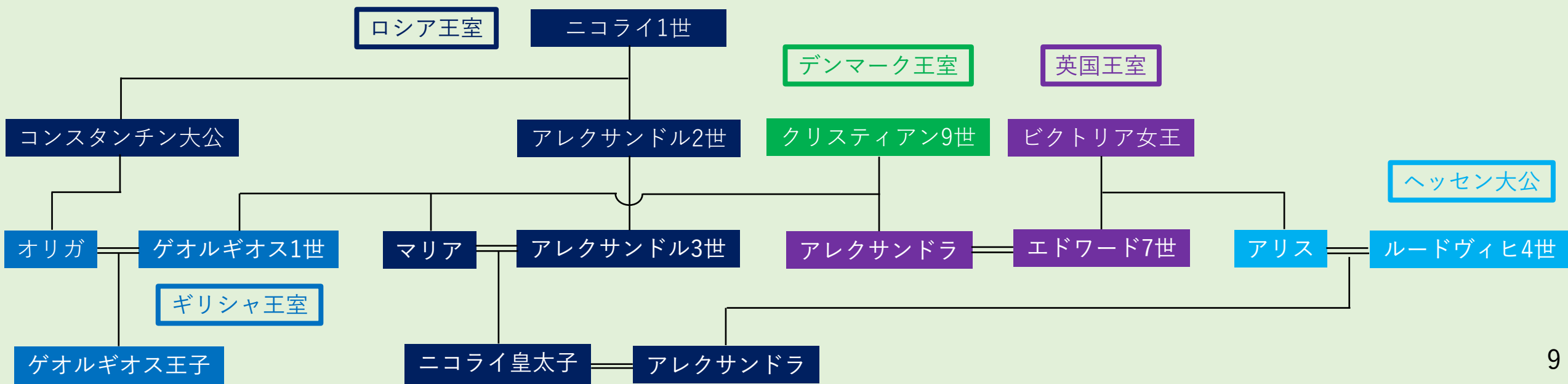


# ロシア王室と縁戚関係にある諸王室の系図（19世紀）

ニコライ皇太子の母親マリア（1847/11/26～1928/10/13）は、ギリシア王国ゲオルギオス1世（Christian Wilhelm Ferdinand Adolf Georg、1845/12/24～1913/3/18）の妹であり、そのゲオルギオス1世の息子がゲオルギオス王子（1869/6/24～1957/11/25）である。つまり、ニコライ皇太子とゲオルギオス王子は従兄弟である。なお、ゲオルギオス1世は、デンマーク王子からギリシア国王となっている。

また、ゲオルギオス王子の母親オリガ（1851/9/3～1926/6/18）は、ニコライの祖父であるロシア皇帝アレクサンドル2世（1818/4/29～1881/3/13）の弟コンスタンチン大公（1827/9/9～1892/1/13）の娘である。この点に着目すれば、ニコライ皇太子とゲオルギオス王子とは「はとこ」でもある。

ちなみに、ニコライ皇太子妃アレクサンドラは、母親が英国王室王女であることから、大英帝国最盛期のビクトリア女王の孫娘にあたる。そのためニコライとアレクサンドラは新婚旅行を兼ねて英国王室を訪問、英国で休暇を過ごした。またアレクサンドラは英語が堪能だったため、アレクサンドラ宛のニコライからの私信は英語で書かれていることが多かった。



# ニコライ皇太子東方旅行の全日程\*

1890/11/4	サンクト・ペテルブルク出発、 <b>鉄道でヴィリニウス・ワルシャワを經由してウィーンへ向かう。</b>
	ウィーン滞在中、オーストリア王室の接遇を受け、さらに鉄道でトリエステに向かう。
11/7	ロシア海軍軍艦「アゾフ記念」号にて <b>トリエステ港を出港</b> 、アテネに向かう（他に2隻が随行）。
	ギリシャ王室の接遇でアテネに7日間滞在、アクロポリス神殿等史跡を訪問。当地で、ギリシャ王室 <b>ゲオルギオス王子が乗艦</b> し、アテネを出港。
11/22~12/10	ポートサイド港（エジプト）到着後、カイロ、ピラミッド、スフィンクス等史跡を訪問、鉄道でスエズに移動、運河を通過した「アゾフ記念」号に再乗船し出港（12/10）、インド洋に向かう。
12/23~1891/1/12	ボンベイ港（インド）到着（12/23）。陸路でアーグラ、ラホール、ヴァーラーナシー、コルカタ、チェンナイ（当時はマドラス）を訪問後、トゥティコリンから再乗船、出港（1891/1/12）。
1/12~2/11	コロombo（スリランカ）滞在。
3/3~4/4	シンガポール港到着（3/3）。その後、ジャカルタ、バンコク、ホーチミン（当時はサイゴン）、香港、南京、武漢を歴訪。この間に艦隊は随行艦を含め6隻となる。
4/27~5/19	<b>長崎待機のロシア艦と合流し、艦隊7隻で長崎到着（4/27）。長崎には5/5まで滞在。その後、鹿児島、神戸、大阪、京都、大津を歴訪後、神戸から出港して帰国の途に就く（5/19）。この間、5/11に大津で警備の警官津田三蔵に切りつけられ負傷し（大津事件）、東京訪問を中止。</b>
5/23	ウラジヴォストーク到着。
8/16	シベリアを横断し、 <b>サンクト・ペテルブルク帰着。</b>

\* 典拠となるロシア語資料には、前掲 Денисьевский М. М., Путешествие...; Терюков А.И., Путешествие на восток, 1998. (<https://web.archive.org/web/20080925062211/http://www.avit-centre.spb.ru/exb/06/kor/k2.htm>)などがある。

# 長崎がニコライ皇太子の最初の訪問地だった理由

1855年2月7日に「日魯通好條約」（日露和親条約または下田条約）が締結されてから3年後の1858年11月に長崎の稲佐地区にロシア海軍病院<sup>\*1</sup>が設置された。それ以降、長崎は太平洋海域のロシア海軍艦艇の修繕地および将兵の保養地となっていた。

ロシア艦隊は、常に長崎港における医療環境の向上に関心を寄せ、海軍病院の拡充に努めてバーニャ（ロシア式サウナ風呂）を設置したほか、修繕所（バツテラや帆布用）等の小規模施設を置いて艦隊の便宜を図った。そして、周辺には、ロシア海軍士官の住宅、ロシア海軍軍人向け商業施設や料亭（諸岡まつの経営するヴォルガが有名）、「ロシア将校集会所」や「魯西亞マタロス休憩所」等の遊興施設などがあって、ロシア海軍関係者で賑わっていた。

温暖で風光明媚、文化的水準の高い長崎、とりわけその稲佐地区は、極東に勤務するロシア・エリートたちにはよく知られた場所で、ニコライ皇太子訪日後の1890年代半ばには、ロシア人向けホテル「ヴェスナー」（「春」の意。経営者は、道永えい=稲佐お栄、のち諸岡まつが経営）も開設されている。こうした、長崎稲佐地区の繁栄は、イギリスをはじめとする各国との間に結ばれた通商航海条約の発効により、1899年、「不平等」条約が一部改正され、領事裁判権が撤廃されて居留地が廃止されるまで続いた<sup>\*2</sup>。

したがって、ニコライ皇太子の最初の日本訪問地として長崎が選ばれたのは、長崎がロシアで周知の場所であり、ニコライの訪問がそこに数多く滞在するロシア海軍将兵への慰問にもなると考えられたからであろう。

<sup>\*1</sup> 1858～1906年に長崎にあったロシア海軍病院については、Павлов, Дмитрий Борисович, Русский военно-морской лазарет в Нагасаки, 1858–1906 гг. (исторический очерк по российским источникам), Япония. Ежегодник, Выпуск: № 39, 2010, с. 252-273 (<https://cyberleninka.ru/article/n/russkiy-voenno-morskoy-lazaret-v-nagasaki-18581906-gg-istoricheskiy-ocherk-po-rossiyskim-istochnikam/viewer>) を参照。

<sup>\*2</sup> 宮崎千穂「不平等条約下における内地雑居問題の一考察－ロシア艦隊と稲佐における「居留地外雑居」問題－」『国際開発研究フォーラム』27、2004年8月 (<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/27/04.pdf>) および同「外国軍隊と港湾都市－明治30年代前半における雲仙のロシア艦隊サナトリウム建設計画を中心に－」『スラヴ研究』No. 55、2008年 (<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/39242/1/55-008.pdf>) を参照。後者には、各年のロシア艦隊入港回数など貴重な統計も示されている。

# 長崎市稲佐地区



日露戦争後、捕虜となったロシア海軍士官・水兵9,000人以上が稲佐地区に滞在していたことも知られている。稲佐にある悟真寺は現在でもロシア人墓地があることで有名で、このロシア人墓地には、**ゴルバチョフ・ソ連大統領が1991年に訪日した際に訪問**している。悟真寺とロシアとの縁はプチャーチン来航時の宿泊先だったことに起因している。



悟真寺ロシア人墓地とロシア正教の祠

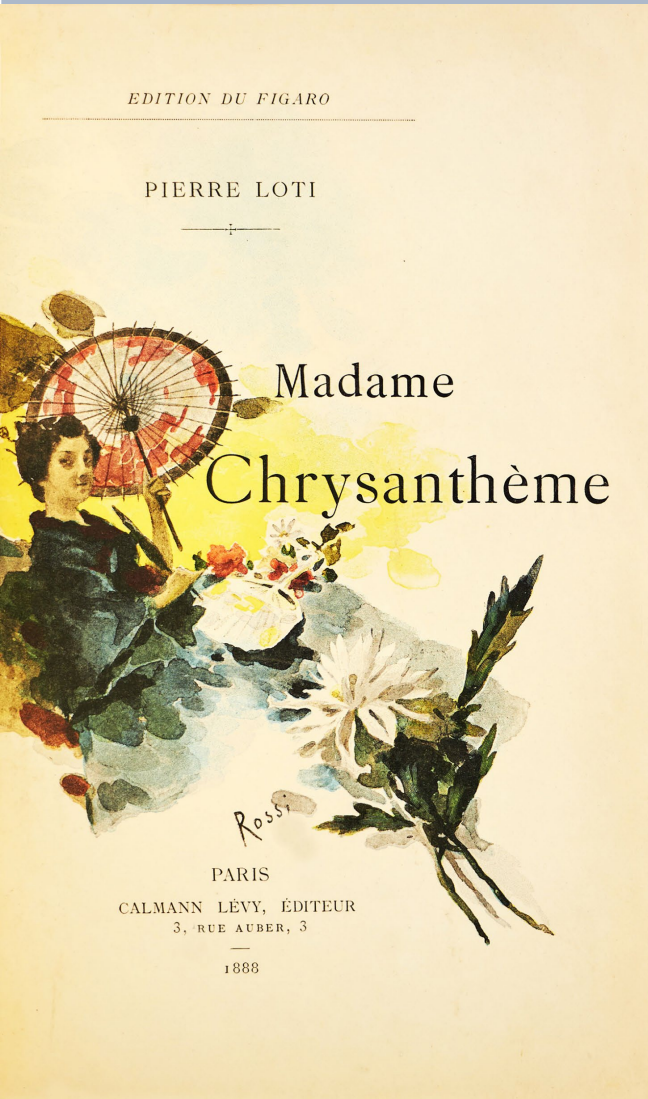
# ニコライ皇太子の長崎上陸前のワクワク感

『ニコライ2世の日記』 1891/4/25  
(長崎到着2日前)

私の心はずっと以前から長崎にある。予定より2日前に長崎に到着できるのがうれしい。そこでの停泊はすばらしいという話だ。

1891/4/26 (長崎到着前日)

日本旅行の準備のために『お菊さん』\*1を読み始めた。



この小説の現代的評価は難しい。「かれは皮肉たっぷりに、日本人のすることなすことに驚き呆れて見せて、さんざん日本と日本人の悪口を言っている。だが、じっさいに目に映ったこと、耳に聞こえたこと、舌で味わったことを、一切の感傷を排して率直に写生的に書き記したことも事実で、そこからかえって、お菊さんへの情愛、長崎への愛着が色濃くにじみ出ているように感じられる」\*2といった比較的好意的な評価がある一方で、「あまりにも日本や日本人をこきおろしており、差別用語大満載の書物」\*3との批判的な評価もある。しかし、少なくともニコライ皇太子は、これを読んで、長崎と日本の訪問にますます胸をふくらませていたことが、その日記から窺われる。

\*1 ピエール・ロティ (Pierre Loti)、本名ルイ・マリー＝ジュリアン・ヴィオー (Louis Marie - Julien Viaud、1850/1/14～1923/6/ 10) の書いた小説 (1887年刊。邦訳は、根津憲三訳・白水社・1952年、関根秀雄訳・河出文庫・1954年、野上豊一郎訳・岩波文庫・1988年があるが、いずれも著者名はピエール・ロチとなっている)。ロティはフランス海軍士官でもあり、作家でもあった。ロティは、1885年と1900年に長崎に滞在しており、1回目の滞在経験をもとに、日記形式の小説『お菊さん』を書いた。ロシア王室・貴族の事実上の公用語は仏語であり、ニコライ皇太子も仏語はもちろん英独語も堪能だったので、仏語の原書を読んでいたと思われる。

\*2 [http:// goodfeeling.cocolognifty.com/camarade/cat\\_7795767/index.html](http://goodfeeling.cocolognifty.com/camarade/cat_7795767/index.html)

\*3 <http://www.yamashina-mashiro.com/book3/ques.cgi?no=64& mode=qaview&resmode =on &page=0>

# ニコライ皇太子長崎上陸

1891/4/28 日本初上陸の日	12時にプリンス有栖川宮*1がフリゲート艦（「アゾフ記念」号）にやってきた。若い海軍士官だ。彼は1889年にガッチナ宮殿（ペテルブルグ郊外の離宮）を訪れたことがある。好感の持てる人物だ。
長崎の印象	長崎市の家屋と街路は、素晴らしく気持ちのよい印象を与えてくれる。至るところ掃除が行き届き、小ざっぱりしていて、彼らの家の中に入るのが楽しい。日本人は男も女も親切で愛想がよく、中国人と正反対だ*2。とくに驚いたのはロシア語を話す人が多いことだった*3。

\*1 有栖川宮威仁（ありすがわのみやたけひと）親王（1862/2/11～1913/7/5）。皇族、海軍軍人。彼は、1881年1月9日から1883年6月6日まで英国海軍大学留学および仏米訪問、また1889年2月から1890年4月まで米、仏、英、露、スペイン、スイス、北欧各国歴訪をおこなっている。彼は、こうした国際経験、とりわけロシア訪問時にニコライ皇太子と会っているという経歴から、ニコライ皇太子の接待役を命じられた。なお、いったんは皇女和宮と婚約したものの、公武合体論により和宮は14代将軍徳川家茂に降嫁することになったため、和宮との婚約を破棄された有栖川宮熾仁（たるひと）親王（のち倒幕軍の総司令官にあたる東征大総督に就任）は異母兄である。

\*2 この記述から、中国人は外国人に対して不親切で無愛想だと、中国人を否定的に評価してしまうのは、いささか公平性を欠く。というのは、中国は、1840～42年のアヘン戦争で英国に侵略され、さらに1856～60年のアロー戦争では英仏に侵略され、ひどい目に遭っているからである。そんな経験をしている中国人が、同じ欧州のロシアの皇太子に親切で愛想がよいというのは考えにくい。それに対して、日本人は、それほど外国からひどい目に遭ったという経験はしていない。

\*3 これは、長崎が太平洋海域のロシア海軍艦艇の修繕地および将兵の保養地だったこと、つまりロシア海軍将兵たちが、一定期間、長崎で生活していたことと関係している。実際、長崎の稲佐地区には、士官用の住宅があり、彼らの多くは現地妻をめとり、日本人を女中、下男、従者などとして雇用し、また出入りの御用聞きや商人も少なくなかったはずである。またすでに述べた病院のほか、水兵向けの遊興施設・保養施設などもあったことがわかっている。そうした施設でロシア人を相手に仕事をしている日本人の多くがロシア語を話すことができたのは当然である。

# ニコライ皇太子、長崎を楽しむ



1891/4/28 ニコライは7軒の商店を訪れている。その1軒、**江崎鼈甲店**\*1には、そのときニコライが名刺代わりに与えた「善人江崎栄造殿皇太子ニコライ」と書かれた肖像写真が現在でも残っている\*2。

昼食のあとに、右腕に**ドラゴン（竜）の入れ墨**をする決意をした。（中略）ドラゴンは見事に彫られており、腕はまったく痛まなかった。

5/4 食後に密かに艦を抜け出て、ゲオルギウス、ゴリツィン（長崎駐留の将校）らと一緒に稲佐村のゴリツィン宅へ直行した。そこで何人かの将校の奥さん（日本人妻）と知り合いになった。・・・彼女たちの間に座る。彼女らはみなロシア語を喋り、非常に好感がもてる。

ロシア語を話す人が多いというのはすでに日記に書かれていたが、この記述もそれを裏付けるものである。そして何よりもニコライが**長崎滞在を楽しんでいる**様子がうかがえる。そして、その後ニコライは、日本側の内務省史料などによると、ロシア仕官寄宿所、福田半造方に行き、そこで芸舞妓5名を招き、5日午前4時に帰艦したとのことである\*3。

\*1 1709年創業の鼈甲専門店の老舗。サンクト・ペテルブルクの中央海軍博物館に、皇太子ニコライが5代目江崎栄造から贈られた鼈甲（べっこう）製の「アゾフ記念」号の模型が残されている。

\*2 保田、前掲書、24頁。左の写真が、ニコライが江崎鼈甲店に与えた写真である。

\*3 同上、32頁。

# ニコライ皇太子、鹿児島、京都へ

1891/5/6 鹿児島の島津忠義邸を訪問（2頁の写真）。このとき忠義がニコライに贈呈した薩摩焼の壺が、サンクト・ペテルブルクのエルミターージュ美術館に残されている。島津忠義・忠重親子はその後も日露交流を推進したことがわかっている\*1。

5/9 神戸に入港。18時過ぎに列車で京都に到着。京都では、京都市盲啞院を訪問、京都市に2,000円を寄付\*2。ニコライは、京都では常盤ホテル（現在の京都ホテル）に宿泊。ニコライには初め洋室が割り当てられたが、彼はそれを断り、日本間に泊まったという\*3。その建物は現在の安養寺に移築されている\*4。また京都市内では、西陣の川島織物を見学したことがわかっている。このとき、二代目川島甚兵衛が製作した綴織（つづれおり）を背景に写真を撮影している（写真は現存）。夜は、有栖川宮らも一緒に八坂神社近くの祇園のお茶屋「中村楼」を密かに訪ね、舞妓20名、芸妓20名らと、遊興している\*5。

\*1 保田、前掲書、40頁。

\*2 『京都府誌 上』京都府、1915年、708頁。

\*3 「京都ホテル100年ものがたり 第一部 前史編 12. ニコライ皇太子」（京都ホテルグループホームページ [https://www.kyotohotel.co.jp/history/chapter\\_01/chapter\\_01\\_12/](https://www.kyotohotel.co.jp/history/chapter_01/chapter_01_12/)）。

\*4 同上、「15. 大津事件余聞」（同上 [https://www.kyotohotel.co.jp/history/chapter\\_01/chapter\\_01\\_15/](https://www.kyotohotel.co.jp/history/chapter_01/chapter_01_15/)）。

\*5 同上、「12. ニコライ皇太子」。





# 大津事件

1891/5/11 ニコライ、琵琶湖遊覧に出かける。その帰途、大津町（現、大津市）で警衛中の滋賀県巡查・津田三蔵（つだ・さんぞう）に斬りつけられ、頭部に軽症を負ったが、同行のゲオルギオス王子と2人の車夫に助けられた（大津事件）\*<sup>1</sup>。犯人を取り押さえた2人の車夫には、のちにニコライから勲章が与えられた\*<sup>2</sup>。滋賀県立琵琶湖文化館には、このときのサーベルと血染めのハンカチが残されている\*<sup>3</sup>。このハンカチに残されたニコライの血痕は、ボリシェヴィキ政権成立後の1918年7月17日に射殺されたニコライ2世とその家族の遺体が第2次世界大戦後、処刑地のエカチェリンプルクのイパチェフ邸の近くの森で発見され、1994年にDNA鑑定により間違いなく本人のものとされたときのDNA鑑定の材料に使用された。

有栖川宮殿下その他日本人の茫然とした顔を見るのはつらかった。

5/13 日本のものはすべて4月29日（大津事件の日の露暦）以前と同じように私の気に入っており、日本人の一人である狂信者がいやな事件を起こしたからといって、善良な日本人に対して少しも腹を立てていない。

大津事件の結果、ニコライ2世は日本人嫌いとなり、それが日露戦争開戦の一つのきっかけになったというのは、まちがった説であることがわかる。この日、明治天皇が東京から急遽京都の宿舎に見舞いに駆けつけている\*<sup>4</sup>。大国ロシアの皇族を日本の警察官が襲うという前代未聞のこの事件で、国内は騒然となったが、天皇の見舞いを皮切りに、日本全国からさまざまな見舞い品がニコライのもとに届けられた。京都では、川島織物の川島甚兵衛が謝罪の気持ちを込めて、双頭の鷲（ロシア皇室の紋章）と菊の紋章（日本の皇室の紋章）が描かれた縁取りのある「犬追物」の図柄の畳6畳敷きほどの大きさの綴織壁掛を寄贈。これはエルミタージュ美術館に現存しており、職人が7人がかりで1年半の歳月をかけて制作されたと言われている。また川島は等身大の舞妓人形も贈ったとされる\*<sup>5</sup>。また寺院の灯籠が1対贈られたが、これは徳川ゆかりの東京の増上寺清揚院殿のものと言われている。

\*<sup>1</sup> 大津事件についての同時代の記録は、尾佐竹猛『大津事件』岩波文庫、1991年に詳しい。\*<sup>2</sup> 保田、前掲書、57頁。\*<sup>3</sup> 滋賀県立琵琶湖文化館ホームページ（[http://www.biwakobunkakan.jp/db/db\\_06/db\\_06\\_001.html](http://www.biwakobunkakan.jp/db/db_06/db_06_001.html)）。\*<sup>4</sup>\*<sup>5</sup> 保田、前掲書、49頁。

# 大津事件の事後処理

1891/5/16	ニコライ、日本旅行（東京訪問）を中止、ウラジヴォストークへ直行せよとの本国からの命令を受領。
5/19日本滞在最終日	明治天皇、「アゾフ記念」号に行幸、再度謝罪*1。天皇が少数の護衛だけを伴って外国軍艦に乗船するのは異例。この日までに多くの市民からの見舞い品が届いたとの記録が残されている。
5/29	大審院、津田に対し、無期徒刑（懲役）の判決。日本政府は、この事件によりロシアとの関係が悪化することを恐れ、内閣・元老らを中心に、津田に対して旧刑法第116条（大逆罪）を適用する動きがあったが、大審院院長・児島惟謙（こじま・これちか）が通常謀殺未遂を適用するよう主張し、上記判決となった。判決後、青木外相は辞職、後任に初代ロシア公使だった榎本武揚が任命された。



「アゾフ記念」号の甲板に置かれたニコライ皇太子に届いた見舞い品（5/13撮影） 18

\*1 保田、前掲書、58-59頁。

# ニコライ2世は日本人嫌いという俗説の例

ニコライが大津事件に遭ったことで、日本嫌いになり、のちの日露開戦の遠因となったという俗説があることはすでに指摘したが、こうした俗説を広めるのに大いに貢献した例として、司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』\*1がある。この小説は、NHKによってドラマ化（全13回連続）され、2009年11月29日から2011年12月25日にかけて放送された。

ニコライ二世は、平素、日本および日本人ということばが出る時、『猿』というあだ名でよんだ。ウイッテによれば公文書にまでこの皇帝は『猿』とかいた。かれは即位する以前から日本人に対し、生理的とまでいえる憎悪をもって、ウイッテも触れている。この憎悪は、皇帝にとって終生のものであった。\*2

日本でも数多くの研究書が翻訳出版されているフランスのロシア史家エレヌ・カレール=ダンコースの『甦るニコライ二世：中断されたロシア近代化への道』は、大津事件について以下のように書いている。

大津で一人の日本人青年が皇太子に襲い掛かり、サーベルの一撃で頭がい骨に裂傷を与えた。傷は比較的深く、傷痕と頭痛を残すことになるが、脳にまでは達していなかった。（中略）1881年のテロ事件\*3以来、ニコライは、爆弾で手足を吹き飛ばされて瀕死の状態だった祖父の思い出と、テロ襲撃への恐怖心にさいなまれていた。自ら体験したばかりの襲撃事件は、辺りに潜む危険と、それから身を守るために必要な権威とについての妄想をいっそう深めさせた。その上、ニコライはアジアにも日本にも好奇心を抱いたことは決してなかった。彼の極東旅行は、読書によっても、いかなる考察によっても準備されなかった。彼にとって、日本は奇妙で、未知で、敵意を含んだ世界だった。大津事件は、彼が理解しようと努力しなかった国に対する嫌悪感を強めさせ、日本人は野蛮人であると確信を深めさせることになる。以後、彼は軽蔑を込めて日本人を『猿』扱いすることになる。この軽蔑心は、日露戦争当時に優越感と無分別さとなって彼の行動に現れることになる。（中略）若きプリンスがアジア的なもの全てに敵意を抱き、『猿ども』が住んでいると考えているこの宇宙で中国人と日本人の判別も不可能だったことを考えるならば、彼が自分に課されている義務を果たすやいなや、文明の天国であるペテルブルクに向け出発を急いだことは想像に難くない。\*4

\*1 『産経新聞』夕刊紙上で、1968年4月から1972年8月にかけて連載された。\*2 司馬遼太郎『坂の上の雲』文春文庫新装版、第2巻、347-348頁。\*3 ロシア皇帝アレクサンドル2世暗殺事件。「血の上の救世主教会」はこの暗殺現場に立つ。\*4 エレヌ・カレール=ダンコース『甦るニコライ二世：中断されたロシア近代化への道』藤原書店、2001年、74-75頁。

# ニコライ2世と日露戦争

司馬遼太郎の『坂の上の雲』は小説であるから許されようが、ダンコーズの『甦るニコライ二世：中断されたロシア近代化への道』の引用部分の主張は、研究としては根拠が不明確である。ダンコーズは、この著作の中で、ニコライの日記について言及してはいるが、先の引用部分を見ただけでも、おそらくニコライの日記を直接に読んでいないし、ニコライの日記に関するすぐれた研究書も参照していないと推測できる。いずれにせよ、「ニコライ二世」の名を冠したこの著作が、少なくとも来日時ニコライ皇太子の実像にはまったく迫っていないことだけは確かである。

すでに見てきたように、事件当時のニコライの言動や日記等には、ニコライがもともと日本嫌いであったとか、大津事件の結果、日本嫌いになったとか、ということを示すものは見当たらない。そしてさらに、本人の日記以外にも、大津事件の後ニコライの日本に対する感情が変化しなかったことを伝える資料がある。

例えば、1891年8月にペテルブルクでニコライを出迎えた日本の西徳二郎駐露公使は「我邦ニ対シテ悪シキ感シハ毛頭保タレサル趣（我が国に対して悪い感情はまったく持っていない様子である）」と報告している\*1。また、翌1892年1月20日、西公使がアニチコフ宮殿にニコライを訪問し、明治天皇の親書、日本の古い武器一式などを贈呈した際、ニコライ皇太子は、「おほきにありがたう（日本語で）。予ハ貴国ニ対シテ誠ニ好キ感情ヲ保テリ（私は貴国に対してとても良い感情を持っている）」と繰り返し述べたことが報告されている\*2。

上記の西公使の報告から、日本政府は、ニコライ皇太子が少なくとも反日的ではなく、親日的である可能性もあると認識していたはずだが、その事実は広く伝えられず、むしろ隠蔽された可能性さえある。他方、ニコライの日記には、日露戦争開戦直前の日露関係についての具体的記述は少なく切迫感はない\*3。しかし、ニコライ2世は、1904年2月9日の開戦時の日記で、「日本軍の厚顔な行為」と書いており、保田孝一によれば、「生涯の日記のなかで、津田三蔵を狂人と書いた以外に日本人を罵った唯一の言葉である」という\*4。これはおそらく、日本海軍による攻撃が2月10日の宣戦布告前に行われたことに対する非難が込められているのであろう。

\*1 西公使より榎本外務大臣宛機密報告第15号「露国皇太子待迎ノ件」（外務省ホームページ [https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/j\\_russia\\_2005/2\\_2.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/j_russia_2005/2_2.html)）。\*2 西公使より榎本外務大臣宛機密報告第1号（1892年1月21日）（同上）。\*3 保田、前掲書、109頁。\*4 同上、115頁。